

鉄の規律

平林初之輔

青空文庫

一

今から何年か前、詳しく言えば、千九百——年の夏のある日、午後八時頃ポーラー「通気性に富む上等の織物」の上着に白セル「薄地の織物」のズボンをつけ、新しいパナマをかぶって、顔にマスクをつけた、背の高い男が、銀座三丁目の常盤ビルディングの六階の一室へ、ふらりとはいつてきた。

もう日はすっかり暮れて、華やかな電気の下を銀ブラのモガ「モダン・ガールの略」、モボ「モダン・ボーイの略」連が、目的のない夜の遊歩を享樂している時刻であつた。

彼は、室の中へはいると、すぐ、ポケットから懷中電灯を取り出して、室内を注意ぶかくしらべまわした。大東京の雑踏の中心にそびえ立っている広壮なビルディングの一室としては、これはまた何たる見すばらしい室内の光景であろう。まるで俄にわかづくりの県会議員の選挙事務所のような、プロザイック〔Prosaic〕おもしろくなく、殺風景な一眺めである。

室の中央には大きな丸卓テーブル子が裸のままに据えつけてあり、その周囲には粗末な椅子いすが五脚並べてある。卓子の上には、シェードを深くおろした台ランプが一つと、マッチをそえた灰皿が一つおいてあるきりだ。通りに面した窓の左寄りに書物机かきものがあつて、その上にはインク壺とペンとがのっている。机の前には、回転椅

子が一つそなえつけてある。その他には、側置卓^{サイドテーブル}子が一つと屑^{くず}籠^{かご}が一つころがつているきり——これがこの室の全調^{ちようど}度である。

マスクの男は素早く室内をしらべおわると、ポケットから紙^{かみき}片^れをつまみ出して、扉^{ドア}の鍵穴につめ、ゆつくりと卓子のそばへ進み寄つて、台ランプのスイッチをひねり、それから懷中電灯を消してポケットの中へしまいこんだ。広い室の中に五燭^{しよく}の電灯がぼつかりついた。三尺とはなれては、新聞さへ読めない程の薄暗さである。窓にはシェードがおろしてあるし、鍵穴にもふたがしてあるので、光は全く室外には洩^もれない。

男はどかりと一つの椅子にすわつて、腕時計を見た。

一分たった。

扉の外にコンコンと、よく耳をすまさなければ聞きとれないくらいなノックがして、第二の男が、やはりマスクをつけて、はいってきた。この男は真っ白なリンネル〔亜麻織物〕の背広を着て、きれいに手入れをした白靴を穿いていた。二人ともまるで見知らぬ人同士のように言葉もかけず、ほとんど顔を見合わしすらしなかった。第二の男は、第一の男にむかいあつた椅子に腰をかけた。二人はほとんど同時に無言で腕時計を見た。

三十秒たった。

また扉の外にノックがきこえて、第三のマスクの男がはいってきた。この男は黒のアルパカ〔薄地の織物〕の上着に、縞セルしまの

ズボンをはいて、むぎわら麦藁帽子をかぶっていた。やはり無言のまま彼は第三の椅子に腰をかけた。

数秒間、室内の空気は威圧するように重苦しかった。

とつぜん第一の男が起たち上がった。

アイ・アム・ナンバー・サーティ
「僕は三十号」彼は英語で言った。

セブンティ・シックス
「七十六号」第二の男がつづいて言った。

ツー・ハンドレッド・トウエンティ・フォー
「二百二十四号」第三の男も同じように言った。

「さて、諸君、今日は中央執行委員から諸君に重大な命令が下つたんだ」と第一の男は棒のようにつつたまま、微かにふるえを帯びた声で言った。「諸君に課せられた任務は非常に困難で、最大限の危険を伴うものだ。しかも準備の期間はあと半日しかな

いのだが、無論、諸君は、喜んでこの任務を担当されることと信ずる」

「もちろん」と二人は異口同音に答えた。

「明朝午前十時東亜局長遠山彦太郎は霞ヶ関の東亜局を九十六号の自動車を出て、桜田門を通過して東京駅に向かうことになっている。その途中で」彼は声を落として囁くように言った。ささや

「彼を暗殺することが諸君に課せられた任務なんだ——」

語尾はひどくふるえていた。二人の聞き手は身体をからだむずむずと動かした。

「どんな理由で？」七十六号がききかえした。

「理由は自分にもわからん、それにわかっていても諸君に言う必

要もなければ、諸君もまた知る必要もない。中央委員の命令は絶対だ。諸君はそれを実行すればよいのだ。諸君には中央委員の命令を審議する権能^{けんのう}はないのだ。このことは既にじゅうぶん承知のことと思うが——」

「だが、こんな重要問題の場合は——」

「重要であるかないかすら諸君は知ることを許されていないはずだ。諸君はただ、与えられた命令事項を完全に遂行する手段さえ考えればよいのだ」

七十六号は沈黙した。

「よし実行を誓う！」しばらくしてから、彼は沈痛な声で言った。
「二百二十四号は？」三十号が厳肅^{げんしゆく}にたずねた。

「むろん異議なし」

「では」と三十号は少し言葉の調子をかえて言った。「諸君も承知のとおり、我々の組織には、あらゆる階級と、あらゆる身分と、あらゆる職業と、あらゆる年齢との、最も有為な男女が網羅もうらされているから、諸君は必要な人間を幾人でも本部に申告して諸君の目的に使用することができぬ。だが、その手続きは今夜の十一時までにとらねばならぬ。それまでにじゅうぶん具体的な計画を練って、それを本部へ報告すれば諸君の任務は終わるのだ。直接実行にあたる者は本部の方で選考することになっている。僕の任務は、このことを諸君に報告すれば終わるのだ」

こう言ったかと思うと三十号は起ち上がって扉ドアの方へ歩いてい

った。

彼は扉のノブに手をかけながら振り返って付け足した。

「では今夜の正十一時だよ。十一時かつきりに僕はここへやってくるから、それまでに、すっかり具体案を作製しておいてもらいたい」

二

あとには二人のマスクの男が残った。互いに相手の顔も知らなければ、名前も知らず、年齢の見当すらも知らない二人が、ただ、正義党の党員番号だけによって、恐るべき共同の大事業について

密議を凝らそうとしているのだ。

それに二人は、互いに相手を十分に警戒する必要もあつた。というのは、最近党の中ヘスパイが潜入しているといううわさがひろまっていたばかりでなく、党の計画が事前に発覚した例が頻々として起こつたからだ。

今も二人は互いに相手をもしやスパイではないかと疑つていたばかりでなく、つい今しがた途方もない中央委員の命令を伝えて歸つていった三十号がスパイではあるまいかという疑いにすらとらわれていたのだ。そして、十一時になったら、三十号がひとりでここへひき返してくるかわりに、一隊の警官でこのビルディングを包囲するかもしれないという考えが期せずして二人の頭の中

に起こつたのであつた。だがどんな疑いが起こつたにもせよ、二人は、ねじを回された齒車のように本部の命令を実行するよりほかはなかつた。というのは、黨員自身は、他の黨員のことも、党の本部がどこにあるかということすらもぜんぜん知らなかつたのであるが、党の中央委員には全国の黨員の一挙手一投足が、手にとるようにわかつていて中央委員の命令に対する違反、不従順は即座の死をもつて罰せられることになつていたからだ。

「七十六号！」としばらくたつてから二百二十四号が低い声で言つた。「君はさつきから馬鹿にぴくぴくしてるようだな。今度の東亜局長暗殺の命令は、よほど君に衝撃を与えたと見えるが、大丈夫かい？」

しばらく不気味な沈黙が室内を領した。五燭の電灯はだんだん暗くなるように思われた。

「実はこの命令には僕は驚いたのだ」としばらくしてから七十六号が言った。「僕はこういう非常手段には個人としては反対する。だが中央委員の命令は黨員にとつては、万有引力と同じ力を持っていることはよく知っている。いいかね君、塔の上から僕が投げ出されたとすれば、否でも応でも僕は落ちるより他はない。僕の意志には僕の肉体の墜落を阻止する力は全然ないのだ——」

「わかつてる。ところで君には成算があるのか？」

「無論、僕は三十号から命令をきいた瞬間に、それを遂行する手段をはつきり頭の中に描いたよ。まあもう少しこちらへ寄りたま

え！」

彼は二百二十四号の耳のそばへ口をもつていつて、何事かをひそひそと囁いた。ささや

二百二十四号は聞きおわると大きくうなずいた。

「そりや素晴らしい名案だ」と彼は低声こゝろこゝろで叫んだ。「僕は実は引き受けるには引き受けたものの、どうしていいかさっぱり目やすがつかなんだのだ」

「ではもうそれで打ち合わせはすんだわけだね、君の方に異議がないとすれば」と七十六号は腕時計を見ながら言った。「まだ十五分しかたっていない。二時間の猶予は長すぎたね」

「と言って外へ遊びに出てくるわけにもいかずね、まあ煙草たばこでも

すうか」

二人は巻煙草を出して火をつけた。重苦しい沈黙が続いた。

「ねえ君」と七十六号が沈黙を破った。「僕は今度の中央委員の命令は言語道断だと思うよ。いやしくも暴力をもつて個人を殺害するということは、我が党の光輝ある伝統にも反するし、人類正義の原則にも反する……」

「君は中央委員の命令を批判しようというんだね？……」

「そうだ。だが、僕は命令には絶対服従する。服従を前提としての批判なら許されてもいいじゃないか？　君はそれだけの自由も我々に認めんのか？　全くの機械で甘んずるのか？」

「むろん我々黨員の辞書には自由という言葉はあり得ない。いま

君の口から出た自由というけちな言葉のために、我が党の歴史はいくたび無益な血で彩られたか知れないのだ。鋼鉄のごとき党の規律のためには、我々は全くの機械となりおおせなくてはならぬ。しかも機械といつても、我々は誰一人完全な機械ではなくて、みな部分品に過ぎんだ。中央委員によつて我々は一つの機械に組み立てられて、はじめて機能を営むことができるんだ。我々の党の組織は、将来の社会の完全な雛ひながた型で、そこには最も厳密な分業と協業とが行われている。我々はただ一つの命令を実行すればいいのだ。いわば一つの鎖の環わなんだ。鎖はそれを使う人の意志に従うので、自分の意志に従うのじやない。鎖の環には意志も自由も必要でない。絶対服従があるのみだ！」

「もうよしたまえ、そのわかりきった講義は。でないと僕は君を軽蔑したくなるからね。ことによるともうすでに軽蔑しているかもしれない。そしておまけに、僕は、そのことによつて、君を軽蔑する自由を完全にもっているということを証拠立てているんだぜ」

「詭弁^{きべん}だ！　じゃ君はどうかしようと言うのか？」

「僕は中央委員に反省を促そうと思うんだ。いかなる理由があつても個人を殺すということはできないということを党の規律の中に挿入することを要求するんだ」

「君の即座の死をもつて中央委員は回答にかえるだろう」

「僕は僕の死をもつて目的を貫徹する」

低い、物^{もの}凄^{すご}い笑いが二百二十四号の口を洩れた。

二人はまた沈黙した。およそ二十分も、おさえつけるような沈黙がつづいた。その間巷ちまたの騒音は手にとるように聞こえていた。

「君はまだ四十前らしいね。額のつやと、手のまる味と、全身の弾力とでそのことがわかる」と二百二十四号が長い沈黙を破って言った。

「僕は今こんなことを考えていたんだよ。我々二人が互いに昼間は同じ会社で机を並べて仕事をしている友人同士で、それが夜になると、互いに番号だけしか個性をもたない見ず知らずの人間として顔をあわしているような場合があるかもしれないね。そして互いに相手をよく知っていても、知らない人としてつきあっていないきやならんとしたらずいぶん滑稽こっけいなもんだらうね」

「僕は」七十六号が答えた。「もつと極端な場合を想像していたよ。中央委員長が僕の親父だったらどうだろうなどとね。それか
らもし僕が暗殺することを命令された当の相手が、僕の兄弟か、
僕の妻だったらどうだろうとね。僕はぞつとしたよ。そういうこ
とは実際ありかねないからね。君は仮に君の殺さねばならぬ相手
が、君の恋人の父親だった場合にはどうするね？ もちろんこれ
は君が若くて恋を知っている人間だと仮定しての話だが？ その
場合君は中央委員の命令に従うかね、それとも君の本能的正義感
に従うかね？」

二百二十四号はマスクの間からじろりと相手を見た。
「そんなことは有り得べからざることだ」

「いや完全に有り得る、現に——」彼は急に何か思い出して口をつぐんだ。

二人が沈黙がちに、時々思い出したようにこんな話をしているうちに、時刻は刻々たつて十一時になった。

ちょうど十一時二分前に、しずかに階段を上がつてくる足音が聞こえた。二人は耳をすました。足音は彼らの室の前でへやぱたりととまった。そして微かなノックが聞こえた。このノックはもちろん党員の間にきめられた、独得のもので、それによつて、すぐに相手が党員であるか**ない**かがわかるようになっていたのだ。

二百二十四号は起ち上がつて、扉のそばドアへ行つて鍵穴から紙片を取つて、鍵を入れてまわした。

マスクの巨漢がはいってきた。

ナンバー・サーティ

「三十号」と彼は機械のように言った。

「二百二十四号」「七十六号」

二人は起ち上がって代わ

る代わる答えた。互いに番号を名乗るのが黨員間の挨拶あいさつでもあり、合い言葉にもなっていたのだ。

三人は同時に椅子いすに腰をかけた。三つの頭は互いに三寸位の距

離まで集まった。七十六号が、ききとれない程の低い声で何事かを語りだした。三十号は時々うなずいては聞いていた。五六分で報告は終わった。三十号は満足したらしい様子で起ち上がって、挨拶もせず、帽子をかぶって扉の方へ歩いていった。

「ちよつと」と二百二十四号が呼びとめた。彼は立ち上がってず

かずかと三十号のそばへ歩いてゆき、相手の耳にすれすれのところまで口をもつていつて二語三語囁ささやいた。三十号はふり返つて、じろりと七十六号を見た。がまたくるりと向こうを向いてそのまま出ていった。

あとにのこつた二人は石のように黙つたまま時計を見ていた。五分たつと、七十六号がだまつてたち上がつて帽子をかぶつて出ていった。

それからまた五分たつと二百二十四号もランプを消して出ていった。

これで覆ふくめん面の男たちの奇妙な会合は散会になつた。

三

その翌朝の九時頃、霞ヶ関の東亜局の一室で、露木秘書官が、朝の便で着いた手紙の整理をしていた。その中に、緑色の封筒に入れた差出人の書名のないのが一通あった。彼は面倒くさそうに封を切った。見る見る彼の顔色は真^まつ蒼^{さお}に変わってきた。

「何か変わったことがあるのかね？」

いつのまにか彼の後ろへ来て立っていた東亜局長遠山彦太郎閣下が、葉巻を口からはなしながら言った。彼は、今朝^{けさ}はこのほか機嫌がよさそうだった。

「お早うございます、閣下」露木は手紙を下においてあわてて言

った。「妙な手紙が一通来ているんです」

「どれ」東亜局長はまた葉巻をくわえ直して無難作むだうさに手を出した。

「東亜局長遠山彦太郎閣下」と彼は読みはじめた。「我が正義党は最近二回にわたりて、閣下に最後の警告を発し、×国に対する閣下のいわゆる積極外交の変改を勧告したことを閣下は記憶せられることと信ず。しかるに、本日銀行家倶楽部における閣下の演説は、閣下の外交方針が依然として旧套きゆうとうを脱せず、×国に対する戦争の危機を緩和せんとする努力を毫末ごうまつも示さざるのみならず、世界をあげて激烈なる軍備競争の渦中に投ぜしめんとするものなることを示せり。是こゝにおいて我が正義党は国民の名により、世界正義の名により、閣下に対し天誅を加うるの余儀よぎなきに至り

たることを遺憾とす。既に我が党は中央執行委員会にてこのことを議決せり。しかして、最も近き将来においてこの決議を実行することを閣下に声明せんとするものなり。終わりにのぞみ、我が党の決議はかつて実行されざりしことなきことを記憶せられんことを。

大日本正義党中央執行委員会」

「また大日本正義党か、まるで子供だましのお伽ときばなし 噺はなしじゃないか。昨今の暑さで気のふれた奴のしわざだろう」と東亜局長は面白そうに言った。「昨日きのうの新聞にも、よその家へうちはいつていきなりこれは俺の家だから出ていってくれなんて言った奴があつたな。暑さのために神経中枢の調子が狂った奴だったんだそうだがね。気候が変調だと人間の頭まで変調になってくるもんだ。こんな気き

狂^{ちが}いの手紙なんか、ほっとけばいいよ。ははは」

彼は秘書官の肩ごしに、ぽいとその手紙を事務机^{つくえ}の上へほうりだした。

「ところがそうではないですよ閣下」と露木は熱心に言った。

「警視庁も検事局も、正義党の活動にはこの一年来悩みぬいてるんです。党員は八千位だという説もあれば十万もあるという説もあるんですが、いずれにしても大変な数に上っていることは事実なんで、それが社会のあらゆる方面へ入りこんでいるんです。ことによると本局へも二人や三人党員が入りこんでいるかもしれません。そして党にはいわゆる「鉄の規律」ちゅう奴があつて、党員の誰がつかまっても、絶対に他の党員には波及せんような仕

組みになつてゐるっていうじゃありませんか。これまでに警視庁の手でつかまつたものはただ一人だそうですが、その一人は、大日本正義党員なにがしと白状したきりで、どんなに手をかえ品をかえて自白を迫つても一言も答えないということです。何しろ、こんな完全な結社は世界にもないといえますからね。決してご油断はならぬと思います」

「ははは」と東亜局長は豪快ごうかいに笑つた。

「君は実に物事を信じやすい男だな。君を坊主にしないで、役人のはしくれに取りあげたのは我が輩の失策だったかもしれんぞ。ところで君はアナトール・フランス（一八四四—一九二四）という小説家を知つとるかね。あの男の小説に、『ピュトワ』という

短編があるがね。それはピウトワという架空の人間を、みんながとうとう実在の人間にしてしまつて恐れているつて筋なんだ。この仮定の人物が至るところへ出沒するんだよ。富豪の客間へでも^{ばすえ}場末の長屋の台所へでもね。そして何もかもピウトワのしわざにされてしまふんだ。君のいま言つた正義党のお伽^{ときばなし}噺とよく似とるよ、ははは——」

このとき卓上電話のベルが鳴つた。露木は受話器をとりあげて耳にあてた。

「はあ、そうです、はあ、では、ちよつとお待ち下さい」

彼は送話口を手でおさえて局長を振り返つた。

「警視総監からお電話です。閣下に直接^{じか}にお話し申し上げたいと

のことで……」

局長は立ったまま、上体をかがめて、机の上に片手で頬杖ほおづえをつきながら、片手で受話器を受けとった。

「もし、もし、私が遠山……ふむ……ふむ……なるほど、今日ですな、どこでどうしてということはわからんですな、実はこちらへも脅迫状が来ていま読んだところですがね。ただの悪戯いたずらの脅迫ですよ。何ができるもんですかい、貴方あなたの方では一体

どうしてそのことがわかったかね。……ふむ、何、正義党の本部へ派遣してあるスパイからの報告で、すると正義党というものはあるにはあるんですな……ふむ……いや何それには及びませんよ。……ふむ……不思議ですな、本部へスパイが入りこんでいて、

本部のありがわからんなんて……何……あなたの方へも？　むこうから？　つまり、正義党からも警視庁へスパイがはいっていて警視庁の活動方針がいちいち向こうへ知れるんですって……信じられんですな……ふむ……いやどうも有り難う、さよなら」

「どうも呆れたもんだ^{あき}」と彼は受話器をかけながら言った。「警視庁までが正義党の幽霊にとりつかれているなんて？」

露木秘書官は心配そうな表情をして局長を見あげて何か言おうとしたが、局長は柱時計を見て急に言った。

「さあもうしたくをしなくちやならんぞ、たしか十時三十分だったね、総理が東京駅へつくのは？　君も一緒に行くんだ。もう九時半過ぎたから、すぐしたくをしなくちや」

東亜局長が扉に手をかけてひっぱろうとすると、扉はひとりでに開いて入口でぼったり給仕にあつた。彼は、あわててお叩頭をして、盆に乗せた名刺を差し出した。局長は名刺を取りあげもせず盆の上にあるのを見ながら、

「何、悴^{せがれ}が、いま忙しいから、あとであうと言ってくれ、午後になつてから」

「ただいまお出かけのところですよと申し上げたんですが、大急ぎの用事だから一分だけお目にかかりたいと仰^{おっしゃ}言るんです」

「仕方のない奴だな、こないだも目のまわるような忙しいときにやつてきて、アフガニスタンの国王の名前を教えてくださいなうんだからな、じゃすぐにここへ来いといってくれ」

「はっ」

給仕が出ていくと入れちがいにはいつてきたのは白いリンネルの背広を着て、しろぐつ白靴を穿いた遠山勝男まさおだった。彼は東亜局長の次男で、一年前から情報部に勤務している真面目で、快活な青年だった。

「昨日きのうの記者倶楽部との試合はなつとらなんだじゃないか」彼は息子の顔を見ると、いきなり愉快そうに言った。「お前のピツチングもあれじゃだめだ。誰か代わりはなかったんか。四フオア球ボールを十六も出すなんて。曲球カーブがちつともはいらんじやないか、五寸もプレートからはなれてるんだから、どんなにアンパイアが同情したって、あれじゃ、ストライクにやできんからのう……」

局長は忙しいと言いながら、暢氣^{のんき}そうに長々と野球の話をはじめるので、勝男の方がはらはらしたくらいだった。

「実は、お父さん、家^{うち}に大事な忘れものをしたんで、ちよつと自動車を押借したいんですがね」

「そりやいかん、局では、お前は我が輩^{せがれ}の忤^{せがれ}じゃなくて、一介の属吏^{ぞくり}じゃからなあ。局長の車を属吏に使用させるわけにやいかん。急ぐなら円タクを呼べばいいだろう」

「一生に一度だけ局長の乗り物にのつかってみたいんですよ。お父さんの使いだということにしてくださいとかまわないでしょう」

局長はこの答えが気に入ったものと見えて、ちよつと考えてから、大きく笑いながら言った。

「しょうのない奴だな、じゃ、二千十八番の方へ乗ってゆけ。あれは最新着のホイツペツトだ。九十六番の方はいけないよ。我が輩もすぐ出かける用事があるんだから、東京駅へ、総理を迎えにゆかにやならんのでな」

「はっ、有り難う」

勝男は大急ぎで出ていった。

局長は大きくのびをして秘書官を振り返って言った。

「さあ、君、我々もすぐに出かけよう」

四

九時四十分頃、桜田門の停留場から、少し参謀本部の方へ寄つた車道に、ビールの空瓶を山のように積んだ一台の貨物自動車が、どこかに故障を起こしたと見えて停止していた。運転手は車から降りて、小首をかしげながら、故障の部分を見きわめようとするかのように、車体の下をのぞきこんだり、タイヤをたたいてみたりして目くばせしていた。

交通巡査がそれをもどかしがつて、舌打ちをしながら、始終運転手を睨^{にら}んで目くばせしていた。

それから十分ばかりたつと、九十六号の自動車が、^{すべ}るように東亜局の門を出た。

交通巡査は突然、貨物自動車の運転手に向かって、いかにも腹

だたしげに「こらっ」と怒鳴^{どな}った。すると運転手は、吃^{びく}驚して、ばね仕掛けの人形のように、いきなり運転手台へとび乗って、ハンドルを手にもち、ブレーキをはずした。車体は徐々に動きだした。

九十六号の自動車はその時ちょうど桜田門停留場まで来た。すると貨物自動車は、急に全速力を出して疾走しはじめ、九十六号が日比谷の方向へカーブしようとして、車体が斜めになった時、弾丸のように九十六号の車体に衝突してしまった。

交通巡査はどうするひまもなかった。彼は貨物自動車が疾走しはじめると、「危ないっ」と叫んで駆けだしたが、もう疾走している車をとめることはできなかった。双方の運転手は衝突の直前

にブレーキをかけて車を止めようとしたが、もう間にあわなかった。九十六号は横ざまに転覆した。貨物自動車の運転手は街上へはね飛ばされた。

交通巡査は急いでかけつけて九十六号の箱の中をのぞきこんだ。それから彼はあわてて呼笛よびこをとりだして力いっぱいふき鳴らした。そのうちに、通行の人々や、電車の乗り替えの人や、わざわざ電車を降りた人のために、周囲には黒山のような人垣ができた。日比谷の方面から、佩剣はいけんをがちやがちやいわせながら警官隊がかけつけた時は、群集を追っ払うのに三人の警官がしばらくかかりつきりにならねばならない程だった。

ちようどこの騒ぎの最中に、東亜局の門を出た二千十八号の自

動車は、群集の間をぬけて、東京駅の方へ走っていった。

貨物自動車の運転手は、額と向こう脛とに擦過傷を負い左手の指先をくじかれて昏倒こんとうしていた。九十六号の運転手は、運転手台からとび降りたところを貨物自動車のタイヤにしかれて、左脚に重傷を負ってその場に気絶していた。

九十六号に乗っていたのは、東亜局長と秘書官とではなくて、東亜局長の次男の勝男だった。あとでわかったことだが、彼は局長の使いだと言って九十六号の運転手に、わざとその車を指定して東亜局を出てきたのであった。勝男の身体からだにはいっけん外傷は無かったが、どうしたわけか、彼は、全く意識を失っており、おまけに他の二人とちがって顔は真ま蒼さおになり、唇は紫色に変わっ

ていた。

三人の負傷者は直ちに、日比谷の原口外科病院に送られた。

貨物自動車の運転手の傷は全治二週間の軽傷だったので彼は手足と頭とに包帯をされて、病院を出ることができたが、九十六号の運転手は、左脚切断の大手術を受けねばならなかった。そして、遠山勝男はついに意識を回復するに至らず、病院へ運ばれた時にはもう身体が冷たくなって、何とも施す術もなかつたので、翌日大学病院へ回送されて死体解剖に付せられた。

勝男の死体検案並びに死体解剖の結果驚くべき事実が発見され

た。死因に關しては前頭部の後方の打撲傷による内出血説と咽喉部を強くしめつけられたための窒息致死説との二つの説にわ

かれ、どちらが先に行われたかわからないということになり、多分、何者かが、彼の脳天にしたたか打撃を加えたあとで、すぐに咽喉^{のど}をしめつけたものであろうということになった。つまり、彼の死は単なる自動車の衝突による過失のための死ではなくて、明白な他殺であることが、死体を検案した警察医並びに解剖^{かいぼう}に立ちあつた医師連全体の一致の見解であつた。

おまけに、死体解剖の結果がわかつたとほとんど同時刻に、医師の見解を立証する速達郵便が警視總監宛で届いた。

我が党は、中央執行委員より、東亜局長暗殺の命を受けたる党員七十六号遠山勝男が、親子の情にかられて、心に動揺を来

せることを同志の報告によりて知り、その心事同情に堪えざるものあれども、党の規律は私事をもつて枉まぐべからず、すなわち涙をふるつてまず彼を断罪したるものなることを閣下に報告するの光榮を有す。遠山勝男は、肉親の恩愛と、我が党の鉄の規律との板ばさみとなりて、自らの命をすてて父を助けたるものにて、その行為はまさに古今の英雄のそれに匹敵するものなり。彼は黨員としての義務と人間としての義務とを、二つながら果たして、自ら死に就きたるものなり、我が党は党則のために彼を断罪したれども彼の尊き心事に同情して、東亜局長に一週間の考慮期間を与うることを約す。もしこの期間内に外交方針に何らの変更を見ざるにおいては、改めて第二の行動に移る

ことを誓う。最後に、何人が、いかなる方法にて、遠山勝男を断罪したるかは、とうてい警察の力をもつて探知し得るものにあらざることを宣言す。何となれば、我が党の秘密は死をもつて厳守さるればなり。よつて無益なる捜査は断念せらるることを勧告するものなり。

大日本正義党

中央執行委員

警視総監

島村林太郎閣下

五

だが警視庁はもちろん、正義党の勧告に従わないで犯人の捜査を開始した。けれども正義党の警告どおり、警視庁の捜査は失敗に終わった。

この事件の証人といえば負傷した運転手が二人と、交通巡査とだけだったのであるが、三人の証言からは何ら、医師の診断を裏書きするような証拠をひき出すことはできなかった。

貨物自動車の運転手はだいたい警官の訊問じんもんに対して次のように答えた。

「四谷区の大木戸からビールの空き瓶を汐留駅まで運んでゆく途中、九時半頃桜田門のところまで来ますと、車に故障がおきたと

見えて動かなくなりましたので、車から降りてしらべていました。ガソリンもなくなつてはいないし、タイヤにも別条はないので、変だと思つて色々しらべていますと、お巡りさんが、こちらを睨にらんでは、早くしろと催促されますので、なおさらいらいらして、故障の箇所がわかりませんでした。そのうちに突然お巡りさんは、（何しろあそこは、虎の門と半蔵門と日比谷との三つの電車の交叉点ですから、無理もないのですが）もどかしくなつて疳かん癰しやくを起こされたと見えて、いきなり『こらっ』と怒鳴られたもんですから、吃驚びっくりして運転手台にのぼつて、ハンドルをもつと、不思議にも車は動き出すんです。そこで、ぐずぐずしてこの上お目玉をくつちや大変だと思つて、スピードを出してかけだしま

すと、虎の門の方から来た九十六号の自動車と衝突してしまったのでございます。咄嗟とつさのことでどうすることもできませんでした。それからあとのことは、病院へかつぎこまれるまでちつとも気がつきませんでした。私の傷なんか大したことないのですが、先方のお客様と運転手さんとにひどい怪我けがをさせたことは何とも申し訳がございません。けれど、お客様が、箱の中にいて別に外傷もなしに、咽喉のどをしめられたり、脳天をひどく打たれたりなさったとすれば、これは誰かが故意にやったことで、車体が大して破損していないことを見ましても、決してただの衝突の結果だとは思われません」

九十六号の運転手が警官の臨床訊問に答えたのは、だいたい次

のごとくであつた。

「勝男様まさおが、局長閣下の至急のお使いだからと仰言おっしゃつたのでこの方をおのせ申して、小石川まで行く途中桜田門前でカーブしようとしますと、いきなり、貨物車が走ってきてぶつかりましたので、こちらではどうするひまありませんでした。それからあのことは私はおぼえていませんが、車体の破損の程度から考えてみましても、勝男様のご負傷の位置や性質から考えてみましても、決してあの衝突のために、あれ程のご重傷をなさったものとは思われません。ああいう場合には運転手は必ず負傷しますが、乗っておられる方は大抵かすれ傷ぐらいですむのが普通です」

交通巡査は、二人の運転手の証言を確認してから彼自身の意見

をつけたした。

「そういうわけですから、私はどちらの過失とも言えないと思います。全くあれは不可抗力でした。九十六号があそこでカーブしたのがわるいとも言えませんし、貨物自動車がまっすぐに進んでいったのが悪いとも言えません。あそこのカーブは右回りですから、しぜん大きなカーブになります。そこを咄嗟の場合双方とも目測を誤ったものと見えます。ほんの一秒間の問題なのですが、それがどうにもならなかったんです。私がかけた時は二人の運転手は車の外に投げとばされたあとでした。九十六号の中のお客は頭をがくりと前へ垂れて、窓へ額をつけてうつぶしになっていました。そのうちに通行人が集まってくるので、私は呼笛よびこを鳴

らしながら群集をさえぎるのに一生懸命でした。まさかその時の中のお客様が死んでおられるとは思いませんでした」

かくて、この事件は、もし医師の検案通り他殺であるとなると、捜査の糸口すらも発見できずに終わった。

その翌日交通巡査の深井浅治は所轄署へ書留郵便で辞表を提出した。非常に神経をつかう交通巡査には、ああいう事件のあとではちよつとしたことにもびくびくして、勤務ができないのが普通なので、辞表は直ちに受理されて、誰も怪しむものはなかった。

警視庁ではさしずめただの交通事故としてこの事件を発表することにし、東亜局長も次男の災厄に対して、法律的手続きをとるようなことはしなかった。「あいつは運が悪かったんだ」と言っ

て彼はあきらめていた。

もつとも前日までのような元氣は彼の顔には見られなかったことはいうまでもないが。

六

しかし、それから三日目の朝、この事件を担当していた捜査課の梅田という若い刑事が、課長室へやってきて、けいし 罫紙二枚つづ綴りの次のような書類を提出した。

意見書

一、遠山勝男まさおの死が他殺なることは、死体検案および死体解剖の結果によつて明らかなり。

二、加害者が大日本正義党の黨員なることは、事件直後、総監の許へ同党中央執行委員より送られたる文書によりてほぼ明らかなり。

三、現場に散乱していたビールの空き瓶の一つに毛髪の付着していたるものあるを発見したるが、顕鏡けんきやうの結果、この毛髪は被害者の毛髪なること判明せり。

四、この空き瓶はいったん自動車の窓より入りて被害者の頭部にあたり、それからさらに窓より車外にころがりたるものと見做さざるべからず。

五、しかるに自動車の中へは空き瓶の自由にしゅつにゆう出入すること
は車体の構造より見て不可能なり。

六、ゆえにこれは何者かが、故意にビール瓶を拾いあげて被害者の頭部に打撃を加えたる後、これをすてたるものとより考
えられず。

七、被害者の咽喉部いんこうにありしという、しめつけられたること
き負傷は、自動車の衝突によりて自然に生じたるものとは絶
対に信じ難い、車内にてかかる性質の傷を受くる可能性なけ
ればなり、これは何者かが、恐らく柔道の心得ある何者かが
ビール瓶にて頭部に打撃を加えたる後、咽喉をしめつけたる
ものなり。

八、衝突当時、現場にいたる者は二人の運転手と交通巡査深井のみなり。しかるに二人の運転手は衝撃を受けて直ちに昏こんと倒うしたるをもつて、被害者に打撃を加え得るものは、三人の中では交通巡査深井のみなり。しかも深井は柔道三段の心得ありしこと判明せり。なお、彼はただちに現場にかけつけ、九十六号の車内を覗のぞきこみたりと自白せり。しかして彼が現場にかけつけてより、群集が集まるまでには二分間以上の時間を経過せり、この時間は、ビール瓶をとりあげて被害者に一撃を加え、さらに被害者の咽喉をしめつけて致死せしむるに十分なり。

九、よつて加害者は交通巡査深井なりと推定す。

一〇、なお貨物自動車の運転手は恐らく共犯者ならん。この二人はかねてより示しあわせて、運転手にわざと車に故障のあるように見せかけて、深井の合図を待ち、深井が「こらっ」と合図すると同時に運転手台にとび乗りて運転をはじめ、九十六号車を目掛けて、自らも死を賭して衝突し、その間に深井は直ちに現場へかけつけて目的を果たしたるものならん。したがってこの二人はともに正義党の黨員にて、かねてより計画されたる筋書によりてこの犯罪は実行されたるものと認む。かく解する時正義党中央執行委員より総監に宛てたる文書の意味も自ら明瞭となる。

以上の事実に基づきて速刻捜査の方針をたてられんことを建

言す。

捜査課長は読み終わると

「成る程」と大きくうなずいた。額には脂汗がにじみ顔色は蒼白になった。

「では早速、深井と自動車の運転手とを拘引しなくちやならん」
彼は興奮して起^たち上がった。

「ところが課長、深井の奴はもうとうに逃げていましたよ」と刑事はしずかに言った。

「私は今朝^{けさ}、この結論に達したので、急いで内偵してみましたか、深井は、あの日からどこかへ逃げてしまつて、行方は誰にもわか

らんとということです。さつそく本籍地の警察へ電話をかけて、いま照会中なんです」

「運転手の方は？」

「やっぱり駄目^{だめ}でした。一昨日^{おととい}ひまをとって出ていったそうです。

この方は本籍も姓名も怪しいと思うのです。もともと、自動車屋の主人の話では、その男は、実直な男で、よく働いてくれたということでしたかね。一体に正義党員の特徴は、何か職業をもっていて、絶対に普通の人と見わけがつかず、業務にはみな非常に勤勉^{めいけん}だという点です。ただ奴らの間にはいわゆる鉄の規律というやつが徹底^{ていし}していて、生命を賭^として事に当たり、生命を賭^として秘密を厳守^{げんしゅ}しているという点です。不逞^{ふてい}な奴らではあるが、その点は

実に感心ですよ」彼はこの時ふと柱時計を見て独り言ちた。「ところでもう四時間になる。至急報でやったんだから返事は来そうなもんだが」

実際、その言葉がおわらぬうちに、給仕^{ボーイ}が捜査課宛の電報をもってきた。

「フカイアサジナルモノトウチニナシ」

課長は呆氣^{あつけ}にとられて、電報を刑事に渡した。

「大方こんなことだと思っていました」と刑事は驚いた様子もなく言った。「とにかく総監から東亜局長に、先日の演説の要旨をひとまず公に取り消していただくように話していただいた方がよいと思いますね。この次には必ず、どんなに警戒したって局長の

生命を防ぎとめることはできんと思いますから、相手は何しろ八千人の決死的黨員をもった正義党のことですからね。それに、黨員はどこに潜入しているかも知からないんですから、ことによると課長、私から見れば貴方^{あなた}だって黨員かもしれず、貴方から見れば私だって黨員かもしれないと思うくらい、嚴重に警戒をしなくちやならんですからね」

「鉄の規律か、なるほど、鉄の規律！」
課長は大きいため息をついた。

*

*

*

その後、正義党の東亜局長暗殺の計画は失敗して、党員は一人のこらず検挙されたということだが、党員八千人とか十万人とかいう説は飛んでもない誇張で、党員はわずか四十九人だったということである。それにしても四十九人の一味で全国の警察界を震^し駭^{んがい}させ、党員の一人が、警官にまでけこむことができた彼らの巧妙さには専門家も舌を巻いていたということだ。

青空文庫情報

底本：「平林初之輔探偵小説選2」[#「2」はローマ数字、1-13-2
2]「論創ミステリ叢書2」論創社

2003（平成15）年11月10日初版第1刷発行

初出：「新青年 第一二巻第一〇号」

1931（昭和6）年8月号

入力：川山隆

校正：門田裕志

2010年12月8日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

鉄の規律

平林初之輔

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>